目次

はしがき……松尾　聰……一

研究篇

藤壺物語――トリスタンとイズー物語との比較から――……高橋和夫……七

源氏物語の物言い――婉曲表現「人」をめぐって――……山本利達……三九

色ごのみの文学……高橋　亨……五九

源氏物語の老人――横川の僧都の母尼君――……永井和子……一〇五

一条朝の日記文学――『和泉式部日記』の成立へ――……森田兼吉……一三七

和泉式部と藤原保昌……伊藤　博……一七五

具平親王の生涯（上）……大曽根　章　介……二一五
三条西家書写の奥入と源語古抄……池　田　利　夫……三三九
——新資料・公条筆異本奥入——

資料篇

異本『源氏物語奥入』（源語古抄）翻印……校訂　池　田　利　夫……三五九
——宮内庁書陵部蔵伝三条西公条筆本——

研究篇

源氏物語の創作にあたって、紫式部が構想したこの物語の基本的な骨組の中心は、桐壺帝の女御に故更衣の子息光源氏が密通して皇子を生み、彼が即位して冷泉帝となる、という構想である。一体、一受領の娘に過ぎない紫式部が、事もあろうに、現実に存在している天皇家の秘事めいたことを、いかに私的な創作であるとはいえ、自著ということがわかる程はっきりした作品に据えるということは、不可解なことではないだろうか。しかし、現実にこの物語が存在し、紫式部がこだわりなく書いているという事実がある。これを不可解なことでないとするには、次の三つのことが考えられよう。

一つは、現実の天皇家にそうした事実があって、あるいは少くともそうした伝承があって、当時の貴族社会ではそれ程異とするには足りなかったという考え方。これで想起されるのは清和天皇妃高子が、入内後も業平と通じていて、陽成天皇の実父は彼であるとする皇室史の秘事が周知だったことである。これを伊勢物語で補強して、この構想の骨組に転用したと見なすのである。

一つは、こういう密通伝説は世界的に伝えられている伝承であって、現実にどうであるかとは別な、王家にまつわる基本的な禁忌だったという考え方。この源氏物語に最も近い物語は、ケルト伝説に発する、トリスタンとイズー物語で、マルク王の妃にと連れて来る役を仰せつかった王の甥トリスタンが、途中媚薬を飲みちがえて王妃イズー（金髪のイズー）と恋に陥り、以後逢引を続け、遂に二人共死によって終る物語である。子供がない点は違うが、トリスタンが不遇な生い立ちであることと、この金髪のイズーの身代りに白い手のイズーと結婚すること、前者は光源氏の臣籍降下に、後者は、意趣返しと愛の代償という逆方向だが、紫上を妻としたこととよく似ている。つまり、こういう禁忌伝承があるからこそ、逆に王位者の怖れが王位を保証する、という物語の役割があるということになる。

源氏物語の創作に当たって、以上の二つがその下敷になっており、こういう密通物語を書いてもよい保証になっていることは否定出来ないであろう。しかしその次に、ではなぜ作者紫式部はこの禁忌に関心を持ち、それをおのが創作の